

JICA 教師海外研修 授業実践報告書

【実践者】

氏名	大槻研	学校名	東京 都・道・府・県 立 大江戸高等 学校
担当教科等	公共	対象学年（人数）	2 年 （27 名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025 年 11 月 ～ 11 月（ 4 時間）		

【実践概要】

1. 実践する教科・領域：「公共」		
2. 単元名と単元目標		
単元名：発展途上国の諸課題と日本の役割		
単元目標：国際社会の安定と成長のために果たすべき日本の役割について考察する		
関連する学習指導要領上の目標：公共：地域の創造，よりよい国家・社会の構築及び平和で安定した国際社会の形成へ主体的に参画し，共に生きる社会を築くという観点から課題を見いだし，その課題の解決に向けて事実を基に協働して考察，構想し，妥当性や効果，実現可能性などを指標にして，論拠を基に自分の考えを説明，論述すること。		
3. 単元の評価 規 準	①知識・技能	持続可能な世界の実現に向けた取り組みについて、資料を活用して身につけた知識を基に、国際社会の課題を多面的・多角的な視点から理解できている。
	②思考・判断・表現	これからの国際社会の在り方について、資料を検証・比較に用いて主張できている。論理に飛躍がなく展開できている。
	③主体的に学習に取り組む態度	国際社会が直面する課題に対して関心を持ち、提示された課題に対して積極的に取り組み、意見を発信しようとしている。
4. 単元設定の理由・単元の意義 (児童/生徒観、教材観、指導観)	【単元設定の理由】 本校は昼夜間の定時制・総合学科・単位制のチャレンジスクールであり、生徒が「今までの自分」から「これからの自分」に向けて、自分の力を信じ、チャレンジすることができるよう日々教育活動を行っている。チャレンジスクールは、小・中学校で学校になじめず不登校の経験があったり、高校で長期欠席等が原因で中途退学を経験したりして、これまでの学校教育の中で能力や適性を十分に生かしきれなかった生徒が多く在籍する。そのため、本校では基礎的・基本的な学習内容の学び直しや自身の意見形成、集団での合意形成など社会で自立するための土台を築くよう日々の教育活動を行っている。 本単元「発展途上国の諸課題と日本の役割」では途上国への支援の在り方を軸として進めるが、本校の生徒にとっては身近な問題ではない。そのため、授業を通じて途	

	上国への支援の在り方に関して自分なりの意見を持って構築し「自分事」として問題をとらえ、他者と対話を重ねながら結論を導く姿を期待する。 【単元の意義】 ①「公共的課題への総合的・協働的なアプローチ」の育成 これまでの学習で身に付けた社会的見方・考え方を活用し、国際協力の在り方について、協働して解決策を考えるプロセスを経験させことで、単なる知識の習得にとどまらず、合意形成や社会参画を意識して共同作業を進める力を養う。 ②「自立した主体としての市民性」の涵養 生徒自身が社会の形成者として行動するときに必要な思考の軸を持ち、自身の意見に根拠を持って対話し、結論を導く力を実践的に使いこなせるようにする。 【児童／生徒観】 バックグラウンドが多様な生徒が集まるため基礎学力や学習意欲の差はあるものの、素直で熱心に授業に取り組む生徒が多い。しかし、自分の意見や意思を全体の前で表出することは苦手とする生徒が多いため、授業では少人数での班内の対話を通して自分の意見を発表する機会を多く設定した。 【指導観】 ①出会う段階では、バングラデシュを日本と比較しながら知り、バングラデシュが置かれている状況を多面的・多角的に理解する。その理解を通じて、バングラデシュへの支援はどのようなかたちで行うべきか、目標を確認する。 ②深める段階では、フォトランゲージを行い、それぞれの写真を通じて日本とバングラデシュの「違い」をとらえる。また、その「違い」をどのように直すべきか、直さざるべきかを考え、支援の必要性を考察する。 ③活かす段階では、架空の村を題材に具体的な支援を考察することで、支援を行う際の配慮事項などを理解する。 これらの手立てにより、途上国への支援の在り方を考察し、自分なりの意見を根拠を持って表現できる力を養いたい。
--	---

5. 単元計画（全 4 時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	発展途上国の諸課題と日本の役割	国際社会における日本の支援や援助について理解する	・日本にとって国際社会との関りや国際社会の安定が重要であることを図表やグラフを通じて理解し、日本が国際社会に対して果たすべき役割を考える。	

2	発展途上国の諸課題と日本の役割	SDGsの目標達成に向けて必要な日本の役割について考察する	・ JICA 紹介動画 (YouTube) を活用し JICA が実施する ODA について理解する。	
3 本時	援助の在り方について考えよう	グローバル化による経済発展がもたらす影響を理解する	・ バングラデシュの基本情報を日本と比較しながら捉え、支援の必要性について理解する。 ・ 支援は金銭的な支援と技術的な支援の両方の側面から行うことが重要であることを理解する。	
4 本時	援助の在り方について考えよう	支援の在り方について自分なりの考えを持つ	・ 村への支援の在り方を具体的な事例を基に考察し、支援を行う際に配慮しなければならないことを理解する。	

6. 本時の展開 (3, 4 時間目)

本時のねらい：どのようなことに配慮し援助を行う必要があるのかを理解する。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点 (支援)
導入 (5 分)	○前時までの復習 ・ 南北問題を例に、途上国が抱える問題を振り返る。その際、先進国が行う支援の実例を例に支援の必要性を振り返る。 ・ 日本が行う支援として JICA の資金協力や技術協力があつたことを振り返る。	
展開 1 (20 分)	○技術協力の必要性 ・ WHO の作成する傾向補水液のレシピを参考に、班ごとに経口補水液を作成する。 ・ 読みにくいレシピを参考に作成することで、モノや資金だけの協力だけではなく技術面の協力が重要であることを理解する。	・ UNICEF が示すアラビア語、スペイン語、英語のレシピを配布する。 ・ 配合を誤った経口補水液の飲むと体調不良を引き起こすこともあるため、作成した経口補水液は飲ませないように留意する。
展開 2 (20 分)	○日本との「違い」を理解する ・ バングラデシュの基本情報を日本と比較しながら捉え、支援の必要性について理解する。 一休憩 5 分	・ 人口、気候、GDP、宗教などに関してグラフや図表を用いて説明する。
展開 3 (20 分)	○日本との「違い」を理解する ・ フォトランゲージを通じて、バングラデシュと日本との「違い」を考える。その後、グループワークを通じて、「違い」を「あっていい違い」と「直すべき違い」とに分け、意見をまとめる。	・ インフラ環境の違いや学校の教室の違い、路上で生活する人々との違いなどに着目させる。

展開 4 (20 分)	○どのように援助を行うべきか考察する ・架空のバングラデシュの村を事例に、「電気」「道路」「水道」「教育」のどれに援助を行うべきかを資料を基に考察する。その際、根拠を持って自分の意見をまとめる。	・相手の立場を踏まえて支援を行うための視点を獲得できるよう指導する。
まとめ (5 分)	○相手の立場に立った援助を考える ・援助を行う際は相手国の立場や環境に配慮する必要があることを理解する。	・支援された蚊帳を漁網として使用されたマラウイでの事例を取り上げ説明する。

7. 資料（教材） ・教科書「公共」実教出版 ・経口補水液の作り方（UNICEF）		
8. 評価規準に基づく本時の評価方法 ・ワークシート、グループワークの様子		
9. 学校外との連携 ※JICA 以外。なければ不要。 ・特になし		
10. 学びの軌跡（児童生徒の反応・変容、感想文、作文、ノートなど） 以下、生徒の意見の抜粋 ・過酷な環境を見て、日本に住んで安全に暮らせていることがどれだけ恵まれているか実感した。 ・道ガッタガタ、めっちゃ長くかけて仕事してる ・自分はとても恵まれていると思った ・日本と全然違う暮らしをしていてびっくりした ・道がガタガタで生活が大変で、無償資金協力によって整備された道路が増えたらいいと思った。 ・日本とは全く違う環境で授業を教えるのもすごい大変だ ・テレビでは伝えられないような貴重なことを知れた		

【本時または単元について、個人で振り返ったことを記載】

11. 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか	バングラデシュでは、ベンガル語をはじめ自分達の文化に強い誇りを持ちそれが国家としてのアイデンティティを形成しているように感じた。人々の暮らしや言葉から「利便性≠豊かさ」ではないことを改めて痛感させられたため、子ども達には先進国の行う支援の在り方を考えさせたいと思った。単純に金銭的な支援や技術協力を一方的に行うのではなく、先進国は支援をする際にその生活をいかに尊重しながら行うのかを考えなければならない。バングラデシュでの暮らしを実際に見聞きした経験があるからこそ、伝えたい内容である。
12. 苦勞した点	あらゆる環境が異なるバングラデシュでの問題や支援の在り方を「自分事」としてとらえるための工夫。ただ知識として知るだけでなく、経口補水液の制作などを通じた体験やフォトランゲージの実施などで少しでも「自分事」として問題意識を持てるように工夫した。
13. 改善点	・本時のまとめでは「相手の立場に立った支援の重要性」を考えた。しかし、「相手の立場に立った支援の重要性」だけでなく、「相手の立場も尊重するが、それでも支援しなければならないこと」という一歩踏み込んだ支援の在り

	方まで考察するべきであった。相手の立場の尊重と利便性の提供はジレンマの関係ともいえるが、「なぜ支援が必要か」「支援を行う意味は何か」を改めて問いかけ、思考を深めていきたい。 ・展開3において日本とバングラデシュの違いを考える場面では、国家のアイデンティティを考えるためにも「あっていい違い」と「直すべき違い」とに分け、意見をまとめさせたが、時間の制約や展開の流れを考えると「直すべき違い」に絞った方が展開はスムーズだった。
14. 成果が出た点	本時の展開3では、生徒は人々の立場や考えを考察したうえで、自分の意見を構築することができた。考える材料としてはあえて多様な意見が入り混じるように意識して人や環境を設定した。その結果、生徒なりに自身の意見に根拠を持って発言できた。
15. 自由記述	授業案作成時のテーマとして、本時は「日本人としての自覚をもって国際社会を主体的に生きる」を掲げた。国際貢献という抽象的な地球レベルの問題をいきなり考えさせることは、生徒にとっては切実性が持てず、現実的ではない。そのため、まずは足元の「ふるさと」を意識し、自分自身の国の文化の持つ価値観をアイデンティティとして保持するために、自分自身の生活とバングラデシュの人々の生活との「違い」を何度も行き来するような工夫を設けた。 「Think globally, act locally（地球規模で考え、足元から行動する）」と表現されるように、この「ふるさと」を常に地球全体の問題とリンクして考える視点が、グローバル化が進展する現在、一層重要性を増していると考ええる。

参考資料・使用教科書：教科書「公共」実教出版